

68. 白幡村はどこにあるか

問 宮城県の白幡村を探しているが見つからない。一体どこにあるか。

答 白幡村は現存する村ではなく、既に消滅した村名です。それは、栗原郡内の藩政時代からの旧村だった沼崎・刈敷の2村と、端郷〔はごう〕だった伊豆野新町とが合併して、明治8年10月17日に成立した村なのです。「栗原郡誌」によれば、刈敷村には白山神社、沼崎村には八幡神社があったので、それぞれの神名の一字づつを組合せた「白幡」を村名としたとあります。それから、明治22年4月1日市町村制実施の際、この白幡村と姫郷村と梅崎村の3村が合併して志波姫村という新村ができました。従って白幡村という村が存在したのはその間の僅か14年間だけです。その後志波姫村は昭和40年1月1日単独で町制を施行し志波姫町として現在に至りました。旧白幡村の地域は、現志波姫町の中心部を占める位置に当たっています。

注(1) 小名〔こな〕ともいい、新開田の進行や人口増等によってできた領内限りの新村。領内では公式の村と同一扱いをするが、「公儀書上不致小名也」で幕府には正式届出をしない新村である。「嘉永五年御分領中村数覚」によると、仙台領の村数は総計1,067村でその中に端郷が59村含まれていた。

注(2) 昭和43年、東京都西多摩の五日市で80年ぶりで発見された草の根憲法の起草者として、にわかには学界の注目を集めている人物、千葉卓三郎の出生地である。卓三郎は嘉永5年〔1852〕6月17日千葉宅之丞の子として生れた。12才頃から大槻磐溪について教えを受けた。17才の時戊辰戦争が起り、白河口の戦闘に従軍したが、敗走に終わった。その後の卓三郎は、医学を修め、国学を学び、仏教の門を叩き、キリスト教に移るなどして、転々と放浪遍歴を続けた。新生を模索する苦悩の生活にきびしく鍛えられながら、卓三郎は時代に目を開いた自由民権家として大きく成長して行った。そして遂に彼の卓抜な才能を開花させる土壌となった五日市に落着くようになったのは、明治8年から9年にかけての間であった。村立小学校勤能学舎の校長で仙台出身の永沼織之允のもとに出入するうち、その助教を勤めることになったからである。当時三多摩は自由民権運動が未曾有の高まりを示しつつあったところである。明治初年の精神文化度は、東京市内をはるかに超えるものがあったとさえいわれる。山村五日市の人々の知性はきわめて高く、学習活動が盛んに行われていた。教職の傍ら卓三郎は、この環境の中で、同志と共に日夜研究討議を積重ねて進歩的な政治思想を吸収し、自らの力で204条にわたる憲法草案を作り出したのである。同時代の30指に余る民衆憲法の中で、特に独創性に富むと評価されるこの草案は、彼が執筆した大量の文書・記録と、彼の手で真赤に書込みがなされた法律専門書数百冊と共に、何

人の目に触れることもなく、近代百年史の底深くひっそりと埋没してしまった。明治14年7月勸農学舎を退職してそこを去ったが、10月に校長永沼織之允が辞任したため卓三郎は第2代校長にと懇請されて再び五日市に戻った。しかし、翌15年6月彼は病に倒れてしまった。病勢は好転せず、同16年〔1883〕11月12日東大附属病院で、僅か31才3か月の短いそして波瀾に満ちた生涯を閉じた。校長在職のまま死亡した卓三郎は、五日市の村人によって谷中天王寺のキリスト教共同墓地に手厚く埋葬されたが、その後その遺骨は方々転々として、現在は仙台市北山の資福寺に眠っている。墓碑に『霜照院観月宗音居士』と刻んである。明治百年の秋、五日市の深沢家の土蔵に秘められてあった彼に関する文書資料が、偶然に日の目を見たとき、忘れ去られていた千葉卓三郎の名が、俄然輝きを放つ人物として再発見されたのである。彼が残した業績は、日本の憲法史上は勿論、民衆の思想形成過程をさぐる上にも貴重な問題を提起するものとして、学界に大きな反響を呼び起した。しかし、80数年という忘却の歳月は、彼自身に関すること、その出生地も、家系も、経歴も、すべてを謎に包みこんでしまっていた。これらのことの困難な追跡調査の端緒となったのは、文書中に紛れていた彼宛の1片の書簡の上書きにあった「栗原郡白幡村」の地名であった。現志波姫町に残る旧白幡村時代の戸籍簿から次々と解明が進み、卓三郎の養女はるじの次男千葉敏雄氏〔明治24年生〕が80才以上〔当時〕の高齢で神戸に現存されていることまで判明するに至った。また勸農学舎助教時代の校長永沼織之允は、岡千仞らに学んだ漢学者で、老後仙台に帰り、柏堂の号を以て漢詩文の大家として知られた。「宮城女学校五十年史」「宮城学院七十年史」によると、明治29年9月から大正5年2月まで、宮城女学校〔現宮城学院〕で漢文を教えている。大正5年2月17日80才で歿し、北山輪王寺に葬られている。永沼織之允と卓三郎とのかかわり合いについてはまだ追究されていない。草の根憲法と千葉卓三郎に関する資料には「民衆憲法の創造」（色川大吉・江川秀雄・新井勝紘）・「明治の文化」（色川大吉）・「宮城人」（朝日新聞社仙台支局）等がある。

資料 宮城県各村字調書（「宮城県史」第32巻の内）

宮城県史第3巻

〔「民衆憲法の創造」（色川大吉等）に次の記事がある。『かれの生れは宮城県……千葉家の面倒をみた広田隆友という人からの手紙の宛名に「栗原郡白幡村」という地名が見えるだけである。これをたよりに仙台に行けばわかるだろうというあまい気持ちで出発したのであった。ところが仙台について見ると、そう簡単にはいかなかった。いくら調べても白幡村は宮城県にはないのである。私たちは途方にくれていた。そのとき仙台市図書館員のひとりが白幡村を知っていた。そうして白幡村は現在の志波姫町であることを教えられたのであった。私たちは車を走らせた。私たちは夢中で明治の戸籍簿に見入った。こうして卓三郎の生れ故郷がこの地であることを私たちは突きとめたのである。』〕